

東京パラリンピックのボート混合かじ付きフォアは、さまざまな障害がある選手と健常者の選手が男女で一緒の艇に乗る。境遇の異なる人々が手を携えて暮らす共生社会を体現するかのような種目だ。日本チームの有安諒平(34)は「私たちが目指す社会のヒントになる」とアピールする。

ボート混合

チームはこぎ手4人と、司令塔役の舵手の計5人で構成され、2000分の直線でタイムを競う。日本は舵手の立田寛之(29)が健常者で、こぎ手の有安と木村由(17)は視覚に、西岡利拡(49)は左手に、八尾陽夏(24)は右半身にそれぞれ障害が

ボートの東京パラリンピック世界最終予選の混合かじ付きフォアに出場した(右から)有安諒平、西岡利拡、木村由、八尾陽夏、立田寛之の日本チーム=6月、イタリア・ガピラテ(日本ボート協会提供)



ンジン役を担う一方、周囲の様子は目が見える選手から伝えてもらう。不得意をカバーし合っている」と説明する。

立田は高校時代から舵手一筋で、健常者の日本代表に選ばれたことがある。人脈を生かして健常者チームと交渉し、パラの選手を練習に交ぜてもらったことも。「壁を取っ払うのは僕がやらなきゃいけない」と意気込む。

新型コロナウイルスの影響で大会延期が決まると、こぎ手の一人が辞退し、一時は予選参加さえ危ぶまれた。それでも、立田は勤めていた広告代理店を退職し、このチームでの大会出場に全てをかけた。最年少の木村が加わり、再スタートを切ることができた。

今年6月の世界最終予選で出場権は得られず、推薦枠での出場となった。上位陣と力の差はあるが、「金メダルを取りたい」と物おじしない木村の言葉で全員が奮起。

有安は「でこぼこした特性のメンバーがどのようにならなくていいか、感じてもらえたらうれしい」と期待した。

「目指す共生社会」体現

ある。木村と西岡の年齢差は32歳だ。

有安によると、他国に

は義足のメンバーがいたり、こぎ手全員が腕や足に障害があったりするケースも。「特性が大きく異なる選手をどうやって一つにするのがこの競技の面白さ」と語る。

方法はいくつかある。日本チームの場合、不自由な手でもオールを操りやすいよう、持ち手を改造するといった道具の工夫に

取り組んだ。全員のこぎ終わるタイミングを合わせて推進力を高めるため、片腕を使う選手と両腕の選手にずれが生じないように調整した。

有安は中学3年で指定難病の黄斑ジストロフィーと診断され、今は人影や色がなんとか認識できる程度。柔道経験者としてのパワーを生かしてエ

障害、性別超え同じ艇に

つなく挑む 超える
東京パラ